

こんなことをやろうと思っておりました

(前職時代の社内向け文章を改変)

2024年3月10日
播羊化学研究所
辻村 豊

1. はじめに

前職時代に注力していた活動および当時描いていた将来像について申し上げますが、もはや過去のことでなく、現在にも繋がるお話として申し上げたい所存でございます。

一般に「業務遂行上、“報告”、“連絡”、“相談”(ハウレンソウと言われる)は必要不可欠」と言われますが、新規製品の研究開発においても例外ではありません。その達成には様々な方法がございますが、研究報告書の作成と配信はハウレンソウ推進のための有効な手段と考えております。

また、技術開発において、最新情報の取得は言うまでもなく非常に重要です。特に英文の速報誌を恒常的に読み、その内容を周囲に伝え、啓蒙したいと考えておりました。

2. 報告書の作成・配信

以前は業務の進捗が比較的遅かった時期もあり、その原因を自ら検証した結果、仕事内容を十分把握できていないことにあると考えました。その反省からタイムリーに研究報告書を作成することを続けました。その結果、報告書数は10年間で400報を越えました。また、同時期に報告書を社内にメールにて配信する活動に誘われ続けました。脱落者が続出する中で、退職までの数年間は一人でやり通しました。

活動の中で、報告書の作成・配信は非常に有益であることが判明してきました。図1に模式図を示すと共に、立場を分けてご説明申し上げます。

i) 本人に対して

まず、頭の中が驚くほど整理されます。そもそも研究開発業務はPDCA (Plan=計画、Do=実行、Check=評価、Act=改善) サイクルの連続と考えます。この中で報告書作成は実験方法や結果を記録するだけでなく、“評価 (Check) =考察” するためにあり、問題点

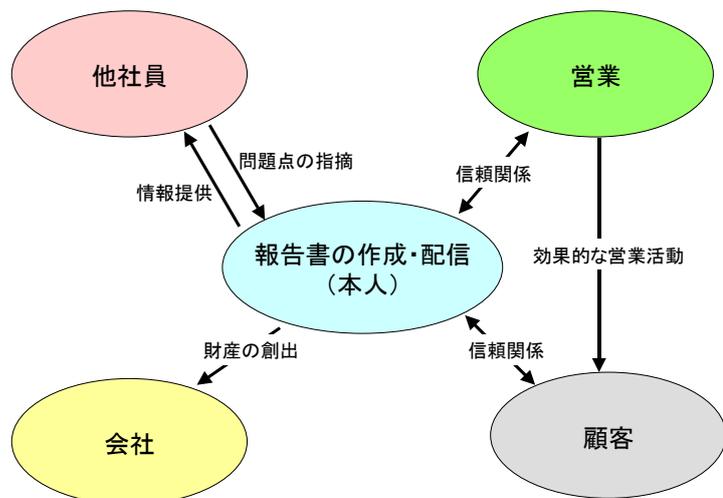


図1 報告書の作成・配信によって得られる効果

を浮上させ、次の活動への原動力となります。また、配信先である他社員からの指摘も貴重な存在で、改善への良い道標となります。

以上より、活動は得るものが多く、何より本人が成長し続けます。

ii) 他社員に対して

組織である以上、どうしても縦割りスタイルとなることが多く、情報が横展開しにくくなる傾向にあります。それゆえ同じ検討を複数の部署で同時に進めたり、あるいは過去の失敗を繰り返したりすることが頻発しておりました。報告書の配信はこれらの問題を防ぐ意味に加えて、議論のきっかけを作る有効な手段であり、或いは開発担当者が業務を他社員に引き継ぐ場合にも役立ちました。製造現場との連携強化にも威力を発揮、更に、開発をサポートするアシスタント社員に対しても、テーマの意義、全体像や進捗状況をより正確に把握、モチベーションを高める効果が十分ありました。

iii) 営業担当者に対して

営業担当者には現時点で得られている成果や逆に問題点を詳細かつ正確に把握してもらうことで、営業活動の質が向上します。実際、報告書を営業担当者に提示したところ、営業活動が活性化され、結果として進捗が速くなったことも事実です。そして、営業担当者との間で確固たる信頼関係が構築できたことも大きなメリットでした。

iv) 顧客に対して

コンプライアンス上の問題があり、顧客に直接報告書を提示することはございませんが、時折報告書作成に際して描いた図等を適度に利用することはありました。この作成した図は、現象を如何にわかりやすく表現するために作られた強力なツールとなりました。更に重要な点として、報告書作成の過程で既に本人の頭の中が整理されているので、顧客との意思疎通が速やかになるばかりでなく、信頼関係も構築されることとなりました。

v) 会社に対して

会社での活動、特に技術の蓄積はそのまま会社の財産です。その有効な手段の一つが報告書の作成であり、社員として当然の義務と考えます。逆に怠ると、例えば、技術の承継が不完全、更には不可能となり、担当者が変わる度に最初から全てをやり直す、実に無駄なエネルギーの浪費を余儀なくされます。更には担当者が定年退職等でいなくなる⇒その技術は消滅、も現実味を帯びます。

以上、報告書作成・配信に関するメリットを申し上げましたが、当時は上記活動を組織的に啓蒙、定着させ、会社の財産の創出を目指しておりました。もっとも、報告書の配信は、他者から厳しい指摘を呼び込むこともあり得ます。その結果として構成員の中には尻

込みする者が出ることも予想されます。しかしながら、厳しい指摘に対しては、当然のことながら、自らも積極的に解決に乗り出し、決して該当する構成員を孤立させないつもりでございました。また、コンプライアンス上の問題など、発信に当たっては最大限の注意を払うことは言うまでもありませんが、万一不幸にしてトラブルが発生した場合には、自らその責任を負うつもりでした。もっとも、同じ会社内の社員間に隠し事など必要なく、積極的に情報交換可能な環境の構築、維持を会社側に強く求めておりました。

3. 英文速報誌からの情報収集

技術開発において、最新情報の習得は必須です。その有効な手段の一つとして、英文速報誌の講読を取り入れております。（日本語ではなく）英文速報誌は世界からの最新情報が詰まっていることや審査がある以上、科学的にも論理的にも正しいと考えるのが自然です。それゆえ英文を読むいささかの労力を払えば、得られるものは絶大と考えます。具体的な活動として、上記報告書と同様に、選んだ論文の内容解説や所感を記したメールを、目標二週間に一度の割合で配信しておりました。その中で、例えば「可塑剤とエポキシ硬化物と自由体積の関係」を扱った論文紹介など、日頃業務で疑問点となっている問題を解決することもありました。もっとも、取り上げる内容は与えられたテーマとは異なる場合も多々ございましたが、着想方法や結果の論じ方など、新規材料開発においても十分参考となったものです。ここで着想方法（動機）はPDCAサイクルのPlanに当たり、成功するか否かは計画段階にあることも多く、重要視しております。また、結果の論じ方はPDCAサイクルのCheckに当たりますが、これも日頃の業務に大きく関係します。その理由として、開発担当者は顧客に対して、開発品の特性や改良点を説明する機会もありますが、その根本は科学的根拠に基づくかなければなりません。論文は科学的挙動を説明する良い教科書で、論文を読み理解することは顧客の立場になることでもあると考えます。例えば単なるDATAの羅列、表のみで終わらせるのではなく、グラフ化するなど、如何にして的確な表現を行うかなど、活動から大いに学ぶべき点が多いと実感しております。

このように、情報収集活動も会社の財産を築くことと考えます。ゆえに、報告書作成・配信同様に、周囲にも啓蒙、定着させることは意義があると考えておりました。また、英文速報誌を常に読むことは、構成員の力量向上にも繋がるはずで

4. おわりに

これは更に先の話にはなるのですが、上述の「報告書の作成・配信」および「英文速報誌からの情報収集」が進めば、行き交う情報量は現状より遥かに多くなると予想しておりました。そこで、仮に事が進んだとすれば、その保管場所や検索システムなど、貴重な情報を簡便且つ有効利用できる環境作りが必要と考えました。(図2)

そのあたりの整備を会社側にも取り組んで欲しい、それが当時の要望でした。

以上が、随分前に描いていた絵ではございますが、現在でも十分通用するお話であると自負しております。

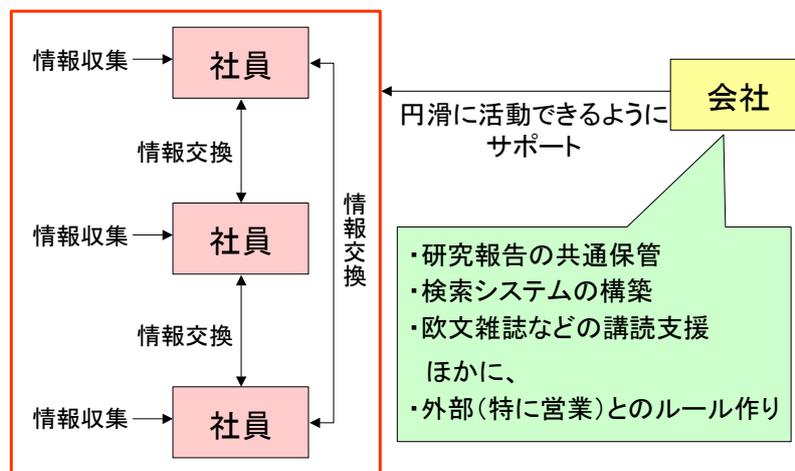


図2 会社に期待すること